

新歴史の見える風景

福井染色株式会社と松井文太郎

染色業の新会社設立の軌跡

足羽郡木田村木田地方（現福井市西木田2丁目8）



△空から見た商工会議所ビル

福井染色本社社屋（木田村木田地方75字西浜50番地、後に福井市に編入され井手町78番地となった）▶



現在の福井商工会議所および福井保健所が所在する敷地は、戦前、足羽郡木田村木田地方に属し、福井精練加工（株）（現セーレン（株））の西浜工場が置かれていた場所である。

明治から大正時代にかけて、福井の繊維産業は「羽二重王国」としてその名を馳せた。しかし、当時の羽二重の輸出先は欧米で、現地で流行に合わせて染色や捺染といった最終加工が行われたため、福井では精練技術の高度化が進んだが、染色は十分に発達しなかった。

転機は第一次世界大戦後の大不況である。輸出羽二重は深刻な不振に陥り、県内の機業界は綿織物など多様な織物生産へと舵を切ることとなった。綿織物は羽二重とは異なり、多くが染色を施して取引・輸出される。当初、この染色加工は京阪地方などの県外業者に委ねられていたが、生産量の増加に伴い、福井の産地内に独自の染色加工基盤を確立すること



が急務となった。

こうした中、県工業試験場は綿織物の染色加工に取組み、並行して、当時の福井政財界のリーダーであった松井文太郎（衆議院議員、福井商工会議所会頭、県織物同業組合長）は、福井染色を設立し、自ら綿布の染色事業に進出した。

当初、染色部門の強化策としては、松井が設立発起人代表を務めた福井精練加工の内部部門を拡張する案も検討されたが、染色先進地の有力者や識者による「分業化・専門化すべき」という意見を尊重し、独立した新会社の設立を決めたのである。

大正15年（1926年）1月、福井染色（株）が創立され、松井が社長に就任した。設立にあたっては、福井精練加工から西浜工場の敷地やボイラー設備を譲り受け、さらに県からも補助金の

交付が行われるなど、まさに官民が一体となり取り組んだ。

ところが、設立直後に輸出綿織物の不況が襲う。会社は苦悩しながら人絹織物の染色加工への転換を決断した。当時、福井産地では綿と人絹の交織から、雙人絹織物へと主力製品が移行しつつあったためである。人絹もまた、綿と同様に最終製品として輸出されるため、染色整理は欠かせない工程であった。

転換当初は技術不足から苦戦を強いられ、数年にわたり赤字が続いた。しかし、昭和恐慌などの荒波を乗り越え、松井の死去後の昭和13年（1938年）には、「艶消顔料捺染法」で特許を取得し、経営は安定した。この間、福井産地の染色加工工業は急速に発展し、「人絹王国」形成の礎となった。

松井はまた、福井県輸出染色工業組合を組織し、これを日本輸出入絹織物染色工業組合連合会へと発展させ、自ら理事長に就任し、戦前の日本の人絹業界の発展に多大なる貢献を果たした。（文 奥山秀範）



昭和大正から福井を牽引した松井会頭



染業界のトップに輝いた花形加工品。多額の金賞を受賞した